日本一の
ハスカップのまち
厚真町（あつま）

厚真の四季

日本一のハスカップのまち 厚真町

「ハスカップ」とは、黒紫色で小指の先ほどの大きさの低木の実です。アイヌ語で「ハシカプ」、「枝の上になるもの」という意味で、昔から土地のアイヌの人びとに「不老長寿の妙薬」として珍重され、食されてきました。

サクラが咲いてウグイスが鳴き、やがてカッコウの声が響き渡るころ、日増しに強まる陽光を浴びた原野や山里では、あちこちに群生するハスカップの木が、漏斗(ろうと)状のクリーム色の花を咲かせ始めます。

２つずつ仲良く寄り添って咲くクリーム色の花は野や山の緑に映えて、初夏の訪れを告げます。そして原野から山里へと渡るさわやかな風の中で、枝先には小指の先ほどの実がたわわに実り始めます。

その実はやがて濃い紫へと色付き、黒紫色の実が枝先からこぼれ始めるころ、北国は短い夏の盛りを迎えるのです。

勇払原野の一画に位置する農村、厚真町ではこの原野の恵みを古くから大切にし、守り育ててきました。

かつて人びとは、ハスカップを塩漬けにして梅漬代わりにしたり、子どもたちがおやつ代わりにその甘酸っぱい実を摘んでほおばったりして楽しんだものでした。

今では北海道ならではの希少な農産物として栽培され、ジャムやシロップ、お菓子などに加工され、あるいは生のまま、健康食品として多くの人びとに親しまれています。

ハスカップ栽培に従事する農家が増え、厚真町は作付け面積日本一の「ハスカップのまち」として知られるようになっています。

ハスカップとその名の由来

ハスカップはスイカズラ科の高さ1 ～ 1.5mの落葉低木で、5月中旬ごろに漏斗（ろうと）形のクリーム色の花を咲かせ、7月には黒紫色の実が熟して食用となります。山野に自生するほか、厚真町をはじめ、苫小牧、千歳、美唄などの農家で栽培されています。

ハスカップという名前は、アイヌ語の「ハシカプ（枝の上になるもの）」に由来しています。その語源は「ハシ（枝）・カ（上）・オ（なる）・プ（もの）」で、つないで発音すると「ハシカプ」と聞こえ、これが訛（なま）って「ハスカップ」になりました。

和名では「ケヨノミ」といい、その変種の「クロミノウグイスカグラ」と合わせて「ハスカップ」と呼ばれています。

双方の違いは、新しい枝に細かな毛が生えていて高山や亜高山に多いのが「ケヨノミ」、新しい枝に毛が少なくて低地や湿原に多いのが「クロミノウグイスカグラ」で、北海道内の農家で栽培されている多くは、低地に多い「クロミノウグイスカグラ」だろうと考えられています。また「クロミノウグイスカグラ」は漢字で「黒実鶯神楽」と書き、ウグイスの鳴くころ神楽を舞うように花が咲き黒い実をつけるというイメージの艶やかさから、こちらの方がハスカップの和名としては有名です。

2つの和名とは別に、ハスカップには「ユノミ」や「ヤチグミ」という呼び方があります。お年寄りなどには、この名で呼ぶ人が多いようです。アイヌの人びとはハスカップのうち細長い実をつけるものを特に「エ（頭の）ヌミ（粒）タンネ（長い）」といい、「ユノミ」の名はこれに由来しているようです。

ハスカップの分布と故郷

ハスカップは、日本では本州中部以北の高山と、北海道の原野や山岳に分布しています。

北海道内の自生地は大きく分けて2つのパターンがあります。勇払原野、釧路湿原、霧多布湿原、別海町などの低湿地と、知床半島や大雪山、雄阿寒岳、夕張岳、羊蹄山などの山岳地帯です。一般に山岳にはケヨノミ、低湿地にはその変種のクロミノウグイスカグラが多いとされていますが、道内最大の群生地である勇払原野にはその両方が群生していて特徴的だといいます。

勇払原野は、シベリアを源流とする北方の植物と、本州から北上してきた南方の植物、カムチャツカ・千島列島を経てきた東方からの植物が交じりあって生きている植物の宝庫で、研究者によると勇払原野で見られる植物は、確認されただけで142科1492種（中居・2004年）にも及びます。

ではハスカップの故郷はどこなのでしょうか。それはシベリアのバイカル湖周辺ではないかといわれています。実際、勇払原野とバイカル湖の周辺の原野には、同じ種類の植物や似た風景が見られます。

バイカル湖はアムール川をさかのぼったタイガと呼ばれるシベリアカラマツやシベリアシラカンバの林につつまれたところにあります。透き通るようなシベリアの青空を映したその湖は「シベリアの青い瞳」と呼ばれ、周辺の草原には勇払原野に見られる、エゾスカシユリ、エゾカワラナデシコ、イソツツジ、ツリガネニンジンなどの草花に交じって、ハスカップが黒紫色の実をたくさんつけているといいます。

シベリアの原野

バイカル湖

シベリアのハスカップ

イソツツジ

ツリガネニンジン

エゾカワラナデシコ

エゾスカシユリ

■北海道内の
ハスカップの分布

花言葉「愛の契(ちぎ)り」の由来

ハスカップをはじめとするスイカズラ科の植物には「愛の契(ちぎ)り」という花言葉があります。それは実の付き方に由来します。

4月下旬、ハスカップの木の枝先に芽吹きが始まります（写真1）。原野の春の訪れです。5月になると、その春に新しく伸ばした枝の葉の脇につぼみができ、中旬から下旬にかけてクリーム色をした漏斗(ろうと)形の花が咲き始めます（写真2）。

この花をよく見ると、ひとつの根元から仲良く2つの花が咲いているのが分かります。並んだ2つの花の子房が合体して1粒の実をつくっているのです。

6月中旬、原野は初夏。2つの花はひとつの実を結んでいます（写真3）。まだ熟していない1粒の実の先に、2つの花の跡があるのが分かります。

2つの花が仲良く合体してひとつの実を結ぶ、それが花言葉「愛の契(ちぎ)り」の由来です。

通常、この2つの子房からなる実が、各葉腋(ようえき)に2個ずつなります。ですから、仲の良さもひとしおです。

こうして6月下旬から7月になると、濃

1

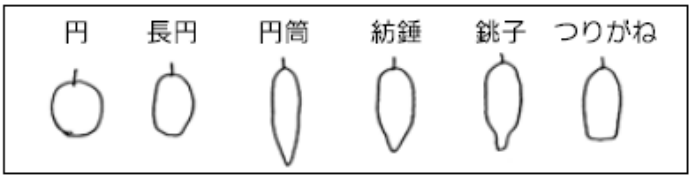
2

3

4

い紫色の実がたわわになり原野は真夏を迎えます（写真４）。

ハスカップは個々の木による性質の違いが大きく、実の大きさや形、甘みや酸味も木によって少しずつちがいます。実の形も、円形、長円形、円筒（えんとう）形、紡錘（ぼうすい）形、銚子（ちょうし）形、つりがね形などさまざまです。



実を切ってみると、2つの子房が1粒になっているのが分かります。

ハスカップを守り育てる

勇払原野とその周辺に生きる人びとは、古くからハスカップを塩漬けや砂糖漬けにしてその味を楽しんできました。庭に苗を移植したり、挿し木で増やしたりもしていました。

厚真町内でハスカップの生産が始まったのは昭和40年代のことです。港の建設や工業地帯の造成などで勇払原野の開発が進み、その中で失われていくハスカップを農家の人たちが移植して守り育て、昭和57年ごろからは本格的な生産が始まりました。

林業試験場や農業試験場などでも栽培技術の研究が行われ、品種改良への取り組みも進みました。多種多様な性質をもつ自生のものの中から甘みが強く大きな実をつける木を選び、その子孫を増やしていくのです。

1992年に道立中央農業試験場が品種改良したハスカップは勇払原野のハスカップをもとにしたもので、収量がそれまでの1.5 ～２倍もありました。枝張りがよくて実も大きく、

酸度は少なくて実に含まれる種子の数が少ないため加工に適しているなどの長所もありました。このハスカップは「ゆうふつ」と名付けられ、多くのハスカップ栽培農家に浸透していきました。農家での独自の研究も進み、厚真町内ではとりわけ甘味の強い「ゆうしげ」、爽やかな酸味の「あつまみらい」といった優れた大粒の品種が誕生しています。

2018年7月現在、厚真町内ではおよそ100戸を超える農家がハスカップ栽培に従事し、その作付け面積は33haにも及び日本一の広さを誇っています。

施肥、敷き藁、剪定など丁寧に管理します。

収穫と選別：実は一粒ずつ手で収穫し、ごみなどを取り除きます。

あつまみらい

ゆうしげ

ゆうふつ

ハスカップ利用の今昔

ハスカップは生で食べたり、塩漬け、お菓子の材料などに利用されています。ハスカップを原料とした商品はケーキ、ゼリー、ジャム、シロップ、羊羹、飴、ジュース、ワインなど、多くのものが販売されています。

ハスカップの利用では、生食、漬け物などはかなり以前から知られていましたが、その成分が研究され、菓子類に利用されるようになったのは昭和の初めころです。

昭和10年発行「北海道工業試験場時報」に「野生果実ハスカップの利用に就いて」という研究報告が載っています。この研究は、勇払原野の一画、現在の苫小牧市沼ノ端地区の野生のハスカップを使って、酸性度や灰分、繊維、糖分などの成分を分析し、加熱による色や蔗糖（しょとう）などの成分の変化、ハスカップ果汁による寒天への影響などを調べました。

その結果、ハスカップの天然の色と酸甘味は人工着色製品を寄せ付けない優位性があり「原料野生にして豊富なること、蒐集（しゅうしゅう）（採集）に容易なること、固有の魅惑的な色彩を有し加熱により退色せざること、独特の甘味を有すること」により、特産、名物として大変将来性があると結論づけているのです。

昭和10年の北海道工業試験場時報に掲載された「ハスカップの利用について」

この研究がされたころのハスカップ製品といえば、苫小牧の業者が開発した「ハスカップ羊羹」などいくつかだけでした。その後、ハスカップは多くの菓子類に利用され始め、近年では「不老長寿の実」と呼ばれた、その秘密を解き明かすまでに厚真産ハスカップの成分分析が進んでいます。

昭和10年代のハスカップ羊羹の包装

少女の命を救った「ハスカップ」

厚真町の隣の苫小牧市にはこんな実話があります。

昭和12年ころのこと、当時の苫小牧西小学校では神社のお祭りの７月15日、全校児童が神社にお参りをする全校参拝をしていました。この年も全校参拝があり、参拝の後、高学年は神社付近で、１年生は学校の前まで戻り解散しました。

ところが夜になって、１年生の女の子の１人がまだ家に帰らないと騒ぎになり、親や警察はもちろん、学校の先生方も連絡を取り合って祭りの夜店やサーカス小屋などを探しました。

女の子がいなくなってちょうど２週間目、線路工事の人が、厚真の近くの弁天の原野で赤いマントを着た女の子を発見しました。担任の先生方に迎えられた女の子は思ったより元気で、この間、のどが乾くと沼の水を飲み、おなかがすくとハスカップ

の実を採って食べていたといいます。

ハスカップの実が少女の命を救ったことは、当時の（昭和12年７月31日付）、北海タイムス朝刊に「草の実を食べて２週間を凌ぐ、幼女が奇跡の生還」として報じられました。

田植えの後のヤチグミ（ハスカップ）採り

厚真町豊沢の原野の一角にヤチグミの採れる高台がありました。これは普通ハスカップと呼ばれて、勇払原野特有の小さな木の実で、集落の人たちは「ヤチグミ」と呼んでいました。原野に生えている潅木で、かなりの広さに群生していました。５月の中旬になると、うす黄色の花を咲かせ、やがて花が落ちると青い実をつけ、次第に赤くなります。そして、６月下旬になると濃い紫色になります。

集落の人たちは田植えを終えると、この高台に集まります。ヤチグミの木は高さが人の背丈ほどなので、田植えで腰を曲げ通しだったのを伸ばすのにちょうどよいのです。口に入れて舌で強く押すとつぶれて甘ずっぱい味がします。

開拓以来このヤチグミは珍重され、塩漬けにされて冬も食卓に乗りました。また、砂糖と焼酎で漬け、ハスカップ酒にして飲むと体にもよいといわれていました。田植えが終ったあとのヤチグミ採りは集落の人たちの楽しみのひとつでもありました。

あつまるくんは厚真町の
公式キャラクターです。
おなかには、特産のお米を
使った“おにぎり”、頭には作付
面積日本一のハスカップ、背中には、サーフスポット
浜厚真のPRのためサーフボードを背負っています。
あつまるくんのおにぎりは、ポシェットになっていて、
中にはあつまるくんからの素敵なプレゼントが入って
いるという噂があります。

日本一のハスカップのまち
厚真町

発 行 日　2019年11月11日
企画・編集　厚真産ハスカップブランド化推進協議会
発　　行　厚真町
〒059-1692
北海道勇払郡厚真町京町120番地（厚真町産業経済課）
電話0145-27-2486
http://www.town.atsuma.lg.jp
制　　作　一耕社出版
編集協力　JAとまこまい広域農業協同組合
胆振農業改良普及センター東胆振支所
有限会社　中村薬局
吉川雅子

写真、イラストの無断転載をお断りいたします。